
3 作ヒロイン顔合わせ(隼、アイリーン、霞、疾風、レイチェル、綾音)

猛禽龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3作ヒロイン顔合わせ（隼、アイリーン、霞、疾風、レイチエル、綾音）

【Nコード】

N1703B

【作者名】

猛禽龍

【あらすじ】

【失われた絆を取り戻さん】の続編。霧幻天神流忍者の里へ向かうリユウとレイチエル。

リュウはかすみを連れ、早朝にニューヨークへついた。
それから自らの家兼アンティークショップ

【SHINOBI】

へ向かった。店へ通じる一本道へさしかかった時。

『リュウ！？』

店の前を掃除していた茶髪の、翠の目の女が、リュウを認めると駆け寄ってきた。

『アイリーン…』

かすみはしっかり抱き合う二人を呆然と見ていた。

普段のハヤブサさんからは想像出来ない。

だが話しには聞いていた、この人がハヤブサさんの恋人、アイリーンさんかあ。

綺麗な人だな、優しいそう。

アイリーンがかすみの方を向いた。

『リュウ、その子は？』

『君にいつか話した事があつたかもしれない、疾風の妹だ。訳あつて日本にいらなくてな、預かる事になった』

『まあ、そうなの。可哀相に…』

リュウはかすみに向かい

「霞、彼女はアイリーン」

かすみは緊張していた。英語に自信が無いからだ。

『こ、こんにちは、私、の名前、は…』

たどたどしく英語で話してみる。

それでアイリーンはニコツと笑って言った。

「私は日本語も分かるから、大丈夫よ。頼りにしてね」
流暢な日本語だった。

「あ、ありがとうございます」

かすみはホツとした。

『龍、貴方に会わせたい人がいるの』

アイリーンが店の奥に向かって呼びかける。

『レイチエル！いらっしやい！貴女きつと喜ぶわ！』

すると、店の奥から金髪の女が出てきた。

『リュウ…』

女が小さく呟く。

『レイチエル？』

金髪の女は、アイリーンと同じようにリュウに抱き着いた。

いや、抱きつき方はアイリーンより激しいかもしれない。

わっ美女。それにすごい肉体美。

かすみは呆気にとられていた。

『何故、君がここに？』

アイリーンが答える。

『貴方が大会に出ると言って出て行ってしばらくしてから、

彼女が訪ねて来たの。貴方の事を教えたら、帰って来るまで待つっ

て聞かなくて…

でも貴方がいない間、色々と助けてくれたの。

それに珍しい骨董品を持って来てくれるのよ』

レイチエルの持つてくる骨董品とは、色々な遺跡の発掘品だと言う。

『アルマはどうした』

リュウの問いに、レイチエルは満面の笑みを浮かべた。

『アルマは元気よ。一緒に暮らしているわ』

レイチエルには、アルマと言う双子の妹がいる。

『あの子、貴方にとっても感謝しているの、会いたいつて言ってたわ。

今は仕事で忙しいのだけど、いつか会ってやってね』

『…そうか、元気ならよかった』

ただ一人、かすみだけは皆が何を言っているのかちんぷんかんぷんだった。

レイチエルが再びリュウを抱きしめた。

『会いたかったわ、リュウ。貴方をずっと探していたの。でも本当に残念、こんなに可愛い恋人に』
かすみに笑いかけてくる。

『おまけに娘までいたなんてね…隅におけないわ、私が入る余地は無いわね』

アイリーンとリュウは顔を見合わせて笑った。

『レイチエル、彼女は友人の妹だ』

それからかすみに向かって

「かすみ、彼女はレイチエル。昔の知り合いだ」

『どうして言葉を変えるの？』

レイチエルは不思議そうな顔をした。

『彼女は俺と同じ日本から来たばかりだ。だから、まだこちらの言葉がわからない』

『そうだったの』

レイチエルはなるほど、と頷く。

『こ、こんにちは』

レイチエルは微笑む。

「大丈夫、私、少しだけなら、分かる。

リュウの国の言葉、アイリーンに、教えてもらってるの」

レイチエル姉妹が店からそう遠くないアパートに部屋を借りていたので、

霞の部屋を正式に取るまで（と言ってもレイチエル姉妹の部屋の隣なのだが）

一緒に住む事になった。

だが、普段彼女たちがその部屋にいる事は滅多に無い。

何故なら皆がリュウの店へやって来てあれこれ手伝おうとするからだ。

かすみも加わって【SHINOBI】は一層賑やかになった。

リュウが店へ戻ってきて、彼とアイリーンが店の事をするとは言っ

たのだが、

レイチエルは相変わらず店を手伝う（龍といたい）
と言ってちゃっかり居ついているし、

（時たまどこかへ行つて別の仕事をしているようだが）

かすみは英語が出来なくて不安なのだろう、

暇があれば店に来て掃除をしたりアイリーンに英語を教えて貰った
り、

客がいないときは、店でレイチエルに日本の事を話したり、
アイリーンやレイチエルの話を聞いたりしている。

かすみは何とか英語が出来るようになったから、近々バイトを始め
るそうだ。

そんな感じでかすみとアイリーンとレイチエルはとても仲良くなっ
た。

（美女が3人に増えたので男性の来店も更に増え、
元々暮らしには困らなかったのだが収入も更に上がった）

かすみがニューヨークへ来て数ヶ月経ったある日。

リュウ、アイリーン、レイチエル、かすみの4人は揃って店番をし
ていたのだが

客が来なかったのでリュウとアイリーンは何かの書類を書き始め、
かすみはレイチエルに忍の話をしていた。

レイチエルはじつと耳を傾けていて

「そう、カスミはリュウと同じニンジャだったの…」

リュウの国、リュウやカスミが育った里、行つてみたい…」

と呟いた。

レイチエルさん、本当に隼さんが好きなんだわ。とかすみは思った。

「ハヤブサさん、どうでしょう？」

近くにいたハヤブサに声をかける。

「うーむ…」

ハヤブサは書類を書きながら渋い顔をした。

隼流忍者の隠れ里はもう無い。滅ぼされてしまった。唯一の生き残

りがリュウなのだ。

かすみは言葉を添える。

「私の里でしたら、ハヤブサさんのご友人と言う事なら大丈夫ですよ。」

それに疾風兄さん、ハヤブサさんと会えるの、きっと喜ぶと思いますし……」

かすみは、里へ行つて欲しいと言う事を少し強調した。

あれから里がどうなったのか、兄は、両親はどうなったのか、そして綾音は……

リュウはかすみの心情を察し、やれやれというように頭を振った。

「確かに、あちらがどうなってるか一度見て来る必要もあるかもな

……」

「そうしたらどう？」

アイリーンが笑つて口を挟む。

「店の事なら心配要らないわ」

かすみが慌てて言う。

「私も、ちゃんと手伝いますから」

「そうか、それなら……」

こうしてレイチェルは日本へ行く事になった。

日本に着いて、レイチェルは珍しげに周囲を見る。

さすがに二人は仕事用の衣装ではなく、動きやすい服装だった。

『シノビの里はどこ？』

『まだ遠い。乗り物は無いから体力勝負だぞ』

『分かつてる。貴方ほどじゃないけど、ついて行けると思うわ』

『よし』

リュウは先を急ぐ事にした。レイチェルは、リュウのすぐ後を追つて来た。

かすみの故郷、もとい天神流忍者の隠れ里に着いたのは夕刻だった。二人はすぐに頭首疾風のいる所へ通された。相手がリュウだからこ

そだ。

「久しぶりだな」

人払いをして3人になった後、疾風は表情を和ませた。

「ああ」

リュウは頷く。と、疾風がリュウの隣に目線を移した。

正確に言くと、レイチエルへ。

「その人は？」

「彼女はレイチエル。俺の昔の知り合いで、元魔神ハンターだ」

疾風は頷いた。

『疾風だ、宜しく頼む』

疾風の口から出たのはほんの少しドイツ訛りのあるものの流暢な英語だった。

レイチエルは疾風から差し出された手を握り、にっこりと笑う。

「ありがとう、私、日本語も大分分かるようになったのよ」

疾風は感情を表に出さないよう努めつつあらぬ事を考えていた。

以前、付き合っている女性の写真を見せて貰ったが、

その時の相手と名前も顔も違う…

だが別れたとも聞かない…龍、まさかお前…浮気か？

「…アイリーンには黙っておいてやろう」

リュウに向かい、ぼそつと呟くと、レイチエルが嬉しそうに言う。

「是非そうして。私、リュウの二人目だから」

リュウは咳ばらいをした。

「レイチエル、悪乗りしないでくれ」

「あら、私は結構本気よ」

疾風の疑惑を含んだ視線に、リュウは深い溜息を落とした。

「ハヤテ、貴方がカスミの兄さんなのね、カスミが貴方の事を」

疾風が顔色を変え、リュウがぱつとレイチエルの口を抑えた。

「りう？（リュウ？）」

「…レイチエル、今はかすみの話しはしないでくれ」

「？」

レイチエルは不思議そうにしながらも頷いた。

泊まる予定の部屋へ案内される途中で、レイチエルはリュウにそつと耳打ちした。

『ねえリュウ、貴方が普段着でいるところは見た事があるけど、ハヤテもシノビシヨウゾク以外の服装になる時があるのかしら?』
リュウは首を傾げた。

『何故?』

『彼も貴方と同じぐらい素敵ですもの、きつとシノビシヨウゾク以外の服も似合うと思うのだけど』

レイチエルはこっそり言ったようだったが、

リュウは、疾風が全て聞いているであろうことを了解していた。
しばらくして、疾風は急ぎの用事だと言って二人にそれぞれの部屋を伝えた後、

どこかへ行ってしまった。

リュウは部屋へ行く前に周囲に誰がいないのを確認してからレイチエルに

詳しい事を言わなくてすまなかった、

と前置きして疾風とかすみ、二人の経緯を話した。

「…そう、なら、ハヤテはもうカスミと会えないのね…」

レイチエルは悲しそうだった。

「レイチエル、少し一人にするが、いいか」

リュウが立ち上がった。

「いいけど、どこへ行くの?」

「墓参りに、な」

レイチエルも、隼の里の事をもう知っていたから頷いた。

「分かったわ、行つてらっしゃい」

リュウが行ってしまった後。

レイチエルは部屋の外へ出て、散歩を試みることにした。

出歩くことに関してはリュウが何も言わなかったから、多分自由に
していいだろう。

廊下を進むと、離れた所に、遠くを見つめている疾風がいた。

「レイチエル？」

疾風がこちらを向かずに言う。

本当、リユウもカスミも、ニンジャって耳がいいのね。

「話を聞いたわ。大事な人が死んで二度と会えないのも辛いけど、生きているのが分かってて、会えないのもとても辛い事だわ」

レイチエルは疾風の隣に立った。

すると、疾風が何かを感じたように一度だけレイチエルを見つめ、また遠くへ視線を移した。

レイチエルは思う。

自らも双子の妹アルマを殺めなくなかったのに、自分一人ではどうする事も出来なくて、殺す覚悟をしなければならなかった。

リユウが助けてくれなかったら、私はあの子を殺していた…

ハヤテとは事情が違っけれど、でも…

「昔、ね。リユウと会った頃の事よ。」

私にはアルマって言う双子の妹がいるのだけど…」

レイチエルは話始めた。

話している間、疾風は相変わらず遠くを見たままで、話を聞いているのか聞いていないのか分からなかったが、

レイチエルが話し終わると目を閉じてふっとため息をついた。

「大丈夫よ、あの子は貴方の想いをわかってる。」

それに、貴方にもあの子にもリユウがついてるんですもの、きっと上手くいくわ」

「…ありがとう」

「いいえ」

レイチエルはにこつと笑った。

お互いの妹の話をして以来、疾風とレイチエルはすっかり打ち解けたようだった。

数日後の夜、レイチエルの部屋へ疾風が訪ねてきた。

リュウはまた隼の里へ行っている。

襖を開くと、思いがけずスーツ姿の疾風が。

「素敵！とても素敵だわハヤテ」

レイチエルは手を叩いて喜び、そして悪戯っぽく目を輝かせる。

「なんだか舞踏会に行くみたいね。お相手は誰の予定？」

「よければ」

疾風は微笑みながらレイチエルに手を差し出した。レイチエルも

「ドレスじゃなくてごめんなさいね」

と笑って応じる。二人はそのまま縁側へ向かった。

疾風様…

綾音は縁側で踊る二人を、木の陰からこっそりと見ていた。

隣にるのが私だったなら…

そしてふっと笑う。私ったら馬鹿ね、何を期待していたんだろう。

綾音がこの様子を見ているのには理由がある。

疾風の父紫電より、レイチエルの様子を見張るよう命令を受けていたのだ。

つい先ほども、こんなやりとりがあった。

「ほう、疾風はすっかりレイチエル殿を気に入ったか」

綾音からの報告を聞き、満足そうに頷いたのは前頭首であり、

疾風の父である紫電。

「はい、疾風様はレイチエル殿を和ませる為に色々と心を砕いておられます」

綾音は頭を深く下げ、ぎりっと唇を噛んだ。

「分かった、今日のところはもうよい。下がれ」

「はっ」

今日の任務は終わったものの、ふと気になって来て見ればこのざま。自然と涙が溢れて来て、慌てて誰もいない稽古場へ行った。

「本当に馬鹿ね、どんなに想ってても、結ばれる訳無いのよ！兄妹なんだから！」

思わず声に出していた。

「綾音…」

背後から声がして、振り返るとハヤブサがいたので慌てて涙を拭く。「リュウ様！？何かご用でしょうか？」

まさか、聞かれた？

「…想うようになったのは、知る前か」

やはり聞かれていた。

そして綾音は、隼も自分の出生の秘密を知っているのだと感じた。

「そうよ！」

がばつと隼の胸に縋る。

「何で兄妹なの！」

ぎゅつと隼の装束を掴んだ。

「分かってても、寂しいんだから仕方ないでしょ！」

龍は目を閉じた。そして綾音が落ち着くまでじっと待つ事にした。

そうだったのか…綾音…可哀相に…

次の日、綾音は疾風に呼ばれた。

「綾音、父上からレイチエルを見張るよう命を受けているそうだな」

「はい」

「彼女をどう思う？」

「率直に申し上げて構いませんでしょうか」

「構わん、話せ」

「出すぎかと思いますが、

疾風様はレイチエル殿に対して友情以上のものをお示しです。

ですが彼女はリュウ様の友人とは言え、よそ者です。

よそ者に気を許し過ぎるのは…」

「綾音」

その鋭い声に、綾音はびくつと体を奮わせた。

「は、はい！」

「二人でいる時は兄と呼べ」

「はい…疾風兄様」

「そうだ忘れるな、俺はお前の兄だ」

「…はい」

「綾音、おいで」

「え？」

疾風は綾音の髪を優しく撫でた。

「綾音、血が繋がっていなければ、間違い無く俺はお前を娶るだろう」

「疾風…兄様」

「霞がいればどちらか迷うがな」

「兄様！？」

疾風は笑んだ。

「それぐらい、お前達を大事に思っている。

お前は可愛い妹、いずれ幸せな恋をして、嫁いで行くがいい。そう願う」

「レイチエル殿がお好きですか」

「そうだな、好ましく思っている」

疾風は苦笑した。

「だから、お前に彼女を嫌って欲しくないとも思う。

合う、合わないなど人それぞれなのにな」

綾音は穏やかな表情でいいえ、と頭を振った。

「申し訳ありません、レイチエル殿自身が嫌いな訳ではないのです」
この頃から徐々に、綾音の中で疾風を想う気持ちに変化が現れた。
いや、やっと血の繋がった兄と思えるようになったと言い換えてもいい。

「兄様、兄様の幸せが私の幸せです。ですから、応援します」

そして、綾音の気配は消えた。

リュウは隼の里（正確に言うところ跡地）に行っている事が多かったが、二人の間に流れる空気の微妙な変化にはそれとなく気づいていた。

「レイチエル、明日帰国するぞ、荷物をまとめておくように」

ニューヨークへの帰国を予定していた日の前日、リュウはレイチエルに告げた。

「え？そ、そう…ね…」

レイチエルはちらりと近くにいた疾風を見た。

が、疾風はレイチエルの視線を受けて目を閉じてしまった。

レイチエルは再びリュウに視線を戻す。

「もう少し、いてはいけない？」

「疾風、お前はどうかんだ？」

疾風が目を開いた。

「俺は構わん。いたければ好きなだけいればいい」

「ハヤテ…」

彼の表情はかすかに微笑んでいるように見えた。

二人と別れて数時間後、リュウは自分の店に帰って来ていた。

「リュウ！」

「隼さん、お帰りなさい！」

アイリーンとかすみと同時に出てきた。

「あら？レイチエルさんは？」

かすみが首を傾げた。

「日本が気に入ったそうだ」

「そうですか…」

なあんだ、色々話が聞けると思ったのに、少し残念だな。

「安心しろ、日本の様子を伝えるに時々戻って来るそうだから」

言って、二人に店の中へ入ろうと促す。

店に入ってから、リュウはかすみとアイリーンに日本であった事を話した。

一通り話し終わった後、リュウは、ふと思い出したようにかすみに尋ねた。

「霞、レイチエルが疾風を気に入って日本に残ったと言ったらどうする」

「えっそうなんですか!？」

かすみは目を見開いた。

「見た限り、お互い様のようだ」

「レイチエルさんがお義姉さんになるなら、嬉しいですけど」

かすみはくすくすと笑う。

リュウは深く深呼吸をして、一息つく事にした。

しかし彼は知らない、数日後、レイチエルの双子の妹アルマが訪ねてくる事を…

(後書き)

めちゃくちゃ勝手しましたごめんなさいごめんなさい!!でも好き
なんですよこの組み合わせー!!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1703b/>

3作ヒロイン顔合わせ(隼、アイリーン、霞、疾風、レイチェル、綾音)

2010年10月12日01時37分発行